

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 志賀直哉『和解』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

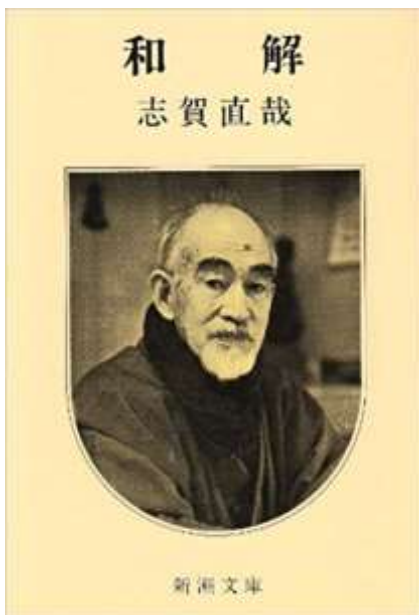
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 53 回のツイキャス読書会の課題図書は、志賀直哉の『和解』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「感動の効用」

順吉はずっと「父との不和」という嫌なことを抱えて生きている。父に対して同情もある。一方で自分に譲れない考えもある。結局はどうにも仕方がないんだと自分で自分を納得させている。だが根本的な解決をしていないから、その嫌なことを思い出して、自分の仕事も邪魔される。「父との不和」を差し引いても、世間は不愉快なことだらけだ。イライラする。不調和になる。

そんな不調和な生活の中で順吉はふと、感動をする。それは留女子の出生に立ち会った時や、ロダンの芸術作品に触れたときだ。順吉は『涙ぐましい亢奮』、『腹の底に湧き上がって来る亢奮』を感じる。ざっくりいって、それは感動したということだ。その感動によって元気になる。愉快になる。調和を取り戻す。そして念願だった「父との不和」も和解へと進んでいく。

何かに感動したことが間接のきっかけとなって、嫌なことの解決に進んでいけることがある。

何かに感動した時、自分は嫌なことを考える執着から解放されている。少し元気を得ている。その後、嫌なことを違った角度から考えることができたりする。明日はよくなるとを信じて眠る。

そして実際翌日には、ささいな自分の思い違いだったことがわかって、結構あっけなくその嫌なことが解決したりする。

何かに感動したことが、嫌なことの解決の間接的なきっかけとしてあったことは、あまり意識されず、解決した日ほどに記憶に残っていないが、順吉と同じく自分にもこれまでの人生で結構あったのではないか。

今回『和解』を読んでそう思いました。

(おわり)

「デザイナー志賀直哉」

志賀直哉の和解を繰り返し 2 回読んだ。最初読んだ時、簡潔な文章にもかかわらずストーリーがよくわからなかった。

主人公、順吉の苦悩をなんとか理解したいと思うのだが、父と不仲になった経緯や、康子との馴れ初めの説明がないため、判然としないまま読み進めた。しかし最後までその説明はなかった。私の想像力にゆだねられているのか、文学的教養を問われているのか、こんな質問をすれば、文学好きの方には、「わかってないなあ」と呆れられそうだが、最近になって古典を読み始めた初心者の私には疑問だった。

淡々と書かれた簡潔な文体の中でとりわけ私は「不愉快だ」という言い切りが頭の中でリフレインしている。順吉の父への複雑な思いと葛藤。苛立ちによる妻への暴言。子供の死。心は固くなっていく。「不愉快」は連鎖するのだ。しかし物語は「不愉快」なだけではない。友人 M との交流や本の出版、そして祖母の愛情や義理の母の気づかいに順吉の心は穏やかになる。憎しみが自然と消えていき、やがて父との和解が実現する。とりわけ康子の出産シーンは人知を超えた神秘的な場面で愉快も不愉快もない、ただ美しいだけの生命の営み、自然の一部だった。この小説のありのままの簡潔な心理描写はストレートに迫りくる迫力があり、かつ美しいと思った。

余談だが、建築好きの私はこの小説を読み終えて、世界の 3 代巨匠建築家の 1 人、ミース・ファン・デル・ローエの名言を思い出した。

God is in the detail (神は細部に宿る) Less is more (より少ないことは、より豊かなこと)

余計な装飾を極限まで排除し本質を浮かび上がらせるミースの建築はとにかくカッコイイ。志賀直哉の小説も同じだ、小説をデザインしていると思った。古典初心者の私でも、感覚でこの小説が少しだけわかった気がした。

(おわり)

『和解』 感想文

私は志賀直哉先生の作品は、初めてだと思い込んでいたのですが2作目で、以前の小僧の神様もいい作品だと思いましたが、今回の和解はさらに心に響きました。でも題名が何か難しそうな感じがしてきつとなかなか読み進められないと覚悟していましたがすぐにお話に引き込まれました。

父と順吉の不和の原因はハッキリと分からなかったのですが、ひとつに康子と結婚したことにあっただのかなと思いました。

他に、実の母親が早くに亡くなってしまって父親との行き違いがあったのかな？と思いました。

きっと、色々な要素が積み重なってきたように思いました。

順吉は、少し考えすぎる所があるように思いました。行動を起こせば案外すんなり済むことも考えすぎて、父親に対しても悪い印象がどんどん膨らんでいったと思いました。

さらに、妻の康子は天然な所があって時々イライラしてしまっていたのかな？と思いました。

私が一番印象に残った所は

(引用はじめ)

出産、それには醜いものは一つもなかった。一つは最も自然な出産だったからでもあろう。妻の顔にも姿勢にも醜いものは毛程も現れなかった。総ては美しかった。

(引用おわり)

祖母の事も大きな要因だと思うけど、出産に立ち会った事によって、今までの父親との関係で思い悩んでいた事がちっぽけに思えたのかな？と思いました。

「留女子」も、祖母の名前を貰った事で家族の一員として認められたような気がしたのかな？ と思いました。

どれも確信は持てませんが、でもとてもいい作品だと思いました。今回の『和解』は、是非友達にも読んでもらいたいのでお勧めしたいと思いました。

(おわり)

自然、涙はこぼれ落ちる

わたしが7年ぶりに再読した「和解」で
やっぱり志賀直哉の文章が好きだなと思う理由。

そこに頑固だが、美しく磨かれた魂を描いてあるから。
そこに信頼のおける友人との、駆け引きのない心の交流が書いてあるから。
そして筆者が自身を見つめたときの本統の心根が映し出されているから。

父と息子の「雪解け」の話は、
対立に少しずつ向き合い、不和を解消してゆくさまが真っ直ぐに書かれている。

赤子の死、新たな命の誕生、祖母との深い愛、新しい母の気遣い。
悲しみと喜びが代わる代わる立ち現れ、まるで大きく季節が変わるかのよう、ゆるやかに家族との関係が変化する。

そしていつのまにか読み手であるわたしまで、この家族のそれぞれの想いに重ねて感情が揺さぶられ
何度も目がうるむ。ほろほろ泣けてきてしまう。

父との衝突の原因は「大津順吉」に、くわしい。
「和解」はすでに主人公との距離を客観的に置いていて、その視線はしなやかであり、
見ているものひとつひとつが、ピントのきちんと合った日常の景色。
筆致は力強く、配色はやさしい湖畔の風景画のように感じられる。

冒頭、墓のもとに眠る祖父と実母の声は、
父との確執を解消するための準備であり、自身と向き合う心の声。

家族が健やかであればと静かに見守っている「誰か」の声は、
墓の下の自分の祖先のみでなく
日本という土地に生まれながらむすびついている根源や精神性、そのルーツである「誰か」。
その存在がどこかから顕れ、意識の上へ引っ張り出される。

家族という箱に、順吉が戻ったときに流れる温かい涙は
生まれて死ぬまで、ひとつに結ばれた約束（家族）へようやく戻ってこれた安心感なのだと思う。

自然から生まれ
自然へ帰る道。

涙がこぼれても我慢しなくていいと
白樺派の世界はいつでも言う。

風景も人も平等に、生を讃える文学。
やっぱりこの美しさに心惹かれる。

(おわり)

「和解」感想文

～a. leaf の独占インタビュー～

とあるホールで、信州読書会主催による志賀氏との独占インタビューが行われた。

a. leaf 「それでは今から「和解」の内容について志賀先生に質問をしたいと思います。」

a. leaf 「まず初めは、得リングさんからの質問です。『順吉が祖母を慕ったのは、母親代わりだったからですか？』」

志賀 「そうですね。尊敬もしていましたし。」

a. leaf 「次はペルーガさんからです。『順吉は、妻の康子に意地悪を言ったり、身重の時も突き倒したり、優しさがみられませんでしたがどうしてですか？』」

志賀 「当時は妻や子供に対して家長、特に由緒ある家系の夫は、あれが普通でした。しかし、次女の出産に立ち会ったことで、順吉は優しくなりましたよ。』」

a. leaf 「続いてでらさわさんからです。『親子が和解した時、みんなが涙を流して喜んだのはなぜですか？』」

志賀 「家の後継者がきまったからです。なるべき人がなったので、特に義母はほっとしました。」

a. leaf 「ざくらさんからも質問があります。『順吉が和解できたのはなぜですか？』」

志賀 「順吉は、家を出たとき、自分は悪くないと思っていましたので、その後家に普通に出入りできないひどい扱いをされるのを不満に思っていました。京都に父が来た時も、謝る気がなかったので、ひどい無視をしました。しかし、これは自分が悪いと思いましたが、意地っ張りな短気な性格のためや父の愛情を疑っていることなどから、なかなか謝ることができませんでした。でも年老いた父が苦しんでいるのがわかったり、次女の出産で妻や子供に対して愛情ができたことで、父の愛情を想像できるようになりました。和解の当日は、素直な心で会えたので、自然に本音が出たのです。」

a. leaf 「次はゆうきちゃんさんからです。『順吉が肖像画の話をした時、父親が何か言いかけてやめましたが、何というつもりだったんですか？』」

志賀 「ありがとうございます。当時は妻や子供にありがとう。を言うことはない時代でしたね。ごめんなさいも言いませんでしたね。まあ、現代でもまだそういう夫はのこっていますが。」

a. leaf 「最後に、私からも質問させていただきます。『先生は文中で頻繁に不愉快という言葉を使っていますが、この言葉は不満足という意味でしょうか？』」

志賀 「その質問は、不愉快ですね！」

a. leaf 「た、た、た、大変失礼いたしました。それではこれでインタビューを終了します。」

数日後、志賀先生と呼ばれた男は、全くの偽物であることが発覚した。責任者である a. leaf は、これに対して次のように弁明している。

「宮澤さん、読書会の皆さん、スイマセンでした。これから、気を付けます。ところで、もし本物の志賀先生だったら、何と答えて下さったでしょうか？どうか、教えて～！！」

(おわり)

『 表に出ずるもの 』

私は、この小説冒頭から順吉親子は本来の意味での不仲ではないと感じた。

それは、順吉の一人称で綴られる文章の随所にその端緒は顕れている。

「自分の心は不快から明かに父を非難していたのにもかかわらず同じ自分の心に蘇っている祖父には少しも父を非難する調子はなかった。」(P9・6行)も祖父が父を非難していないのではなく、順吉の本心のように思う。順吉が口では簡単に父を悪くいえるが、文章に書く際は何かできなかったのもそうだろう。私怨で仕事が穢されるのが恐ろしかったと言いつつ、言い訳しているが。

そこで大岡信氏の「言葉の力」という随筆を思い出した。桜色の染め物は桜の花びらではなく樹皮から染めることに驚いた著者が、一見別の色をしているが本当は全身で花びらの色を生み出している桜と言葉の世界は同じであると気付いた。桜の花びらを生み出す大きな幹のように、言葉の一語一語はそれを生み出す人間を背負っているという内容だ。

順吉親子も、太い幹(相手の本心)ではなく、末端に顕れる花びら(言動)に神経を研ぎ澄ましていただけかもしれない。

米国のユダヤ人作家のエリ・ヴィーゼルの言葉に、「愛の反対は憎しみではない。無関心である。」とある。順吉親子は、不仲でありながらお互いの息遣いを伺いながら関わってきた。近い関係がゆえに、相手の発する言葉ひとつひとつに「集中力」と「最大の関心」を払ってきた。まさにエーリッヒ・フロムのいう愛する条件を体現している。

順吉が不仲の原因のひとつとしていた慧子の死の際も、父や実家に期待があったからこそ、その態度に幻滅したのだ。

瀕死の慧子のために奔走したように、親子は本来理屈ではないのだ。

そもそも不仲の状態を長い間維持するのも、お互いに関心がなければできない。憎しみだけでは、人間は忘れたほうが楽だからだ。根底に愛情があつての「和解」なのだ。

お互いの幹の色は、表では見えない桜色だったに違いない。

和解後の別れ際のプラットホームで、「突然父の眼には或る表情が現れた。それが自分の求めているものだった。」との文章が泣ける。

「自分は今は心から父に対し愛情を感じていた。そして過去の様々な悪い感情が総てその中に溶け込んで行くのを自分は感じた。」(P137・4行)

愛はその時に生まれたのではない。元から、そこにあったのだ。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「川の流れるように」

無縁仏というのがあつた。供養する親戚縁者のいなく成つた死者や靈魂のことを指す。

父と長男が仲違いしたままであつたと、家系が途切れてしまふ。これは、二人だけの問題でなく、末代までに因果をなす。

もし、「和解」しなければ、麻布の家と、順吉の家は、やがて疎遠になつていけだろつ。

かつて一つの流れたつたものが、二つに分かれて、別個のものになつていく。

慧子の死というのは、やがて順吉の血筋の途絶えること暗に示している。

(引用はじめ)

自分は祖母と話していた。祖母は背が丸く、自身の膝に覆いかぶさるような恰好をして煙草をのんでいた。其所に康子が眼を赤くした儘出て来た。康子は祖母の前に来て坐ると、いきなりお辞儀をして震え声で、

「お祖母様、御免遊ばせ」と云つた。

祖母は前からの姿勢で下を向いた儘、煙管の吸口を銜えて黙っていた。祖母の唇は震えていた。

自分はその時、赤児の死で祖母に不愉快を感じた自分を恥じた。

(引用おわり)

父と長男の確執がなければ、祖母は、東京に慧子を連れて行く無理などしなかつた。

慧子が、電車の揺れのために死んだのは、一重に、順吉の意固地のせいである。

順吉は、どこかで、祖母が慧子の死の責任の一端を負っていると思ひ、不愉快を感じていたのだが、その因果は、自分と父との確執が発端であると、ようやく思ひ至つたのだ。

だから、「自分を恥じた」のだ。

祖母は、煙管を銜えて何を思つていたのか？

かつて一つの流れたつたものが、二つに分かれて、別個のものになつていく。

おそらく、祖母の強いまなざしは、その分岐を見ていた。

慧子の死は、調和か、無縁仏かを暗示する出来事だつた。

しかし、次女に祖母の名前からとって「留女子」と名付けたことで、父と息子は『和解』という一つの流れに調和した。

家族の不和が昂じて、流れが途絶えていくのは、夏目漱石の『それから』『門』『こころ』のテーマである。

家族の涙は、和解によって、しかるべき流れがもたらされたゆえである。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343